

飼料情勢

1. とうもろこしのシカゴ定期は、12月には380セント／ブッシェル前後で推移していたが、南米産の豊作見通しと現地通貨安により輸出競争力が高まり、米国産の輸出が低調となったことから弱含みな展開が続き、その後3月31日に米国農務省が発表した作付意向調査で16/17年産とうもろこしの作付面積が市場の予想を上回ったことから下落し、360セント／ブッシェル台で推移していた。その後、ブラジルの乾燥天候による作柄悪化懸念などから390セント／ブッシェル前後まで上昇したが、米国産の作付けが順調に進んでいることなどから370セント／ブッシェル台に値下がりした。現在は、5月10日に米国農務省が発表した需給見通しで期末在庫が市場の予想を下回ったことから上昇し、390セント／ブッシェル台となっている。
2. 大豆粕のシカゴ定期は、12月には310ドル／トン前後で推移していたが、南米産大豆の豊作見通しから弱含みの展開が続き、300ドル／トン前後で推移していた。その後、アルゼンチンで降雨が続く同国産大豆が減産見通しとなったこと、さらに5月10日に米国農務省が発表した需給見通しで期末在庫が市場の予想を下回ったことから上昇が続き、現在は430ドル／トン台となっている。
3. 米国ガルフ・日本間のパナマックス型海上運賃は、11月には30ドル／トン前後で推移していたが、中国むけ石炭の輸送需要が低調になったこと、燃料価格が下落したことなどから軟調な展開となり、25ドル／トン前後で推移していた。その後、中国むけ南米産大豆などの輸送需要の引き合いが増加したこと、原油相場が上昇したことなどにより、現在は30ドル／トン前後となっている。
4. 外国為替は、12月には120円を超える水準で推移していたが、1月に入り、中国経済の減速や原油価格の下落による産油国の財政悪化など世界経済の不透明感に対するリスク回避の動きから117円台まで円高がすすんだ。その後、1月29日に日銀がマイナス金利の導入を決定すると反転し、一時121円台まで円安となったものの、米国経済の減速懸念により利上げが先送りされる見通しとなったこと、世界的な株安などから急速に円高がすすみ、108円前後となった。現在は、6月の米利上げ観測が高まったことから若干円安となり、110円前後となっている。

